



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3977号 2017.10.25 発行

0歳児の2割、ほぼ毎日スマホ

朝日新聞 2017年10月25日



イラスト・田中和

0歳児の20%がほぼ毎日スマートフォンで動画や写真を見ている——。民間シンクタンクのベネッセ教育総合研究所が育児中の母親を対象とした調査で、こんな結果が出た。4年前の前回調査から約6倍に増え、親が手を離せない時などに乳幼児にスマホで遊ばせる「スマホ育児」が急速に浸透しているようだ。

調査は3月に東京、神奈川、千葉、埼玉の首都圏に住む生後6カ月～6歳児がいる母親3400人を対象にネットで実施した。

スマホを持っていた92.4%の中で、「子どもは家庭で1週間あたりどれぐらい見たり使ったりしているか」を尋ねたところ、「ほとんど毎日」と答えた0歳児の親は20.0%（前回調査3.5%）いた。ほかにも1歳児24.4%（同10.7%）、2歳児25.9%（同18.9%）、3歳児23.2%（同19.9%）、4歳児20.0%（同10.7%）、5歳児15.6%（同12.3%）、6歳児18.4%（同8.2%）とすべての年齢で前回調査を上回った。

頻度にかかわらず子どもがスマホを使うとしたのは71.4%で、どんな場面で使っているかを複数回答で聞くと「外出先での待ち時間」が33.7%で最多だった。「子どもが使いたがる時」が29.7%、「子どもが騒ぐとき」が23.5%、「自動車、電車などの移動」が21.6%、「親が家事で手が離せないとき」が15.2%と続いた。全体では1日あたりの使用時間は15分未満が最も多く、70.2%（同87.6%）だった。

調査にあたった担当者は、「会話をしながらなら、絵本のように親子の交流を深めることにも使える。外遊びなどの実体験とのバランスを考え、どう生活に取り入れるかが重要」と話している。（西村圭史）

特別支援校で生徒閉め出し 不適切と教諭戒告、大分 産経新聞 2017年10月24日

大分県教育委員会は24日、県立の特別支援学校の40代女性教諭が、担任を務めるクラスの生徒3人に、給食を減らしたり、教室に鍵を掛けて閉め出したりするなどの不適切な指導を繰り返したとして戒告処分にした。生徒3人は数日間、登校を拒否した。

県教委によると、教諭は「指導がうまくいかず、安易に力に頼った指導になってしまった」と話している。教諭は指導を外れ、4月から校外で研修を受けているという。

同校には中学生と高校生に相当する生徒らが通う。教諭は昨年11月～今年1月に複数回、指導に従わないことを理由に、生徒2人の給食の品数を減らし、うち1人を教員の付き添いなしで教室から出して鍵を掛けた。また、別の生徒1人について、バスから降りなかったとして十数分間ドアを閉め、降車できないようにした。

高齢者「セルフネグレクト」に着目 周囲で連携 ごみ屋敷解消



東京新聞 2017年10月25日
散乱したごみを処分するボランティアたち＝名古屋市内で

各地でたびたび発生する「ごみ屋敷」の問題。認知症などで身の回りのことができなくなった上、他人の支援も嫌がる「セルフネグレクト」に陥った結果が多いとされる。国の推計（二〇一二年公表）では、この状態の高齢者は最大一万二千人。今後、こうした高齢者の増加とともにごみ屋敷も多発すると懸念される中、名古屋市で周囲が連携して解決した事例があった。（諏訪慧）

名古屋市内の一軒家。今年二月、同市昭和区の認知症専門のデイサービス「あつまるハウス駒方」所長の皆本昌尚さん（43）が呼び鈴を押すと、リョウコさん（82）＝仮名＝がおそるおそる玄関の扉を開けた。真冬なのに裸足で、足は黒く汚れていた。

家の中をのぞくと、リンゴやミカンの入ったポリ袋が放置され、腐臭が漂う。庭にあふれ出すまでにはなっていないが、「室内はごみでいっぱいだろう。このままでは大変だ」。皆本さんは感じた。

「一日に二度、三度とスーパーを訪れては、卵や刺し身じょうゆなど同じ物を買うお年寄りがいる」。皆本さんが初めて、リョウコさんのことを聞いたのは一月下旬。レジでお金が足りず、店員を困らせることもあるという。認知症の人に現れやすい行動だ。

十年以上前に夫に先立たれ、一人暮らし。子どもはなく親しい人は近くにいない。地域包括支援センターの職員が「介護保険サービスを利用して生活を安定させたい」と四カ月前から働き掛けたが、リョウコさんは拒絶。そこで、介護職員向けの勉強会で講師を務める皆本さんに相談が持ち掛けられた。

戸口でげんな表情を浮かべるリョウコさんに「うちへ来れば、自分で作るより安くお昼が食べられる」などと誘い、約二週間後、ハウスへ通い始めた。

服は毎日、パジャマの上に黒っぽいコートだったのが、春ごろから変化が表れた。「気持ちいいよ」と他の利用者に誘われ、ハウスで入浴するように。服の洗濯を頼み、入浴に合わせて服を替えて指輪などおしゃれにも気を使い始めた。

やがて「食べ物が増える。持ってきやあ」と言うようになった。皆本さんは、自尊心を傷つけないよう「お言葉に甘えようかな」と、送り迎えの時などに少しずつ受け取った。もらった卵は計二百パック近くあったが、ほぼ全て賞味期限が過ぎていた。特定のメーカーの八枚切りの食パンも大量に引き受けた。

ハウスに通い始めて一カ月ほどたったころ、「もっとたくさん持ってきやあ」と、初めて家に通された。案の定、床は飲みかけのペットボトル飲料や卵などで足の踏み場もないほど。階段はトイレトーパーやキッチンペーパーで埋まっていた。

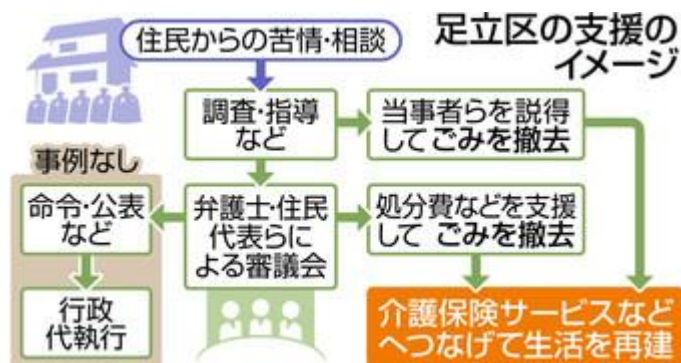
「夏になると食品の傷みが早くなる」と、大掛かりな片付けを提案した。初めは知らない人を家に入れるのを嫌がったが、「あんた（皆本さん）の知り合いなら、ええよ」と納得した。

認知症サポーター養成講座を受けたことがある知り合いらと十人余りで七月に二回、片付けを実施。偏見を持たれてはいけないと、近所への声掛けはしなかった。廃棄した食品は、四十五リットルのごみ袋で計百五十袋ほど。賞味期限の切れたしょうゆやみりんも二百本近くあった。

「『助けてあげる』という“上から目線”にならないよう気を付けた」と皆本さん。最初に

気付き、情報を寄せたスーパーの存在も大きかったという。

今では、ハウスの昼食作りを手伝うのがリョウコさんの日課。皆本さんが「手際いいね」と声を掛けると、「年齢の分だけ経験が多いから、当たり前だわ」と笑みを浮かべる。



◆対応に乗り出す自治体も

セルフネグレクトの人をいかに発見、支援し、生活を安定させるか。全国で共有されている仕組みはなく、多くの場合、自治体や地域に根気強く柔軟に“お節介”を焼く人がいるかどうかにかかっているのが現状といえる。しかし、ごみ屋敷に対応したのをきっかけに、セルフネグレクトの問題を認識し、粘り強い支援態勢を

整える自治体もでてきている。

「強制的に片付けても解決にならない。ごみ屋敷化した原因に目を向けることが大切だと気付きました」。東京都足立区生活環境保全課の祖伝（そでん）和美課長は強調する。

足立区は二〇一三年、全国で初めて、ごみ屋敷のための条例を施行。処分費用を支援したり、片付けに協力した地域住民に謝礼金を支払ったりする内容だ。

以前はごみが道路にはみ出している場合と、ごみから害虫が発生した場合で、担当部署が違い、連携が不十分だった。その反省から、条例施行に先立ち専門部署も新設。これまでに二百五件の相談を受け、百三十三件を解決した。

強制的にごみを処分する行政代執行という手段もあるが、大がかりになり地域で目立つと家人を孤立させてしまう恐れがある上、根本的なごみがたまる原因も解消されない。条例施行以降、同区は代執行を実施しておらず、解決した案件は全て話し合いによる。介護保険サービスなどを使って暮らしを落ち着かせ、再発を防ぐ。

手間と時間はかかる。条例ができる前、七十代女性と子ども二人が暮らす古い家の近くの住民から「手入れされていない庭から、木の枝葉がはみ出して危ない」と苦情が寄せられた。

調べると、一家は水道が止められ公共施設でペットボトルに水をためて生活するほど困窮していた。庭には生ごみが捨てられ、小山のようだった。女性は精神的に落ち着きを欠いている様子で、職員は「二度と来るな」と怒声を浴び、生活保護を勧めても拒まれた。

祖伝課長が別の職員から担当を引き継いで半年ほどたったころ、世間話から少し心を開いてくれるように。ごみの分別や集積所の掃除などの当番ができず、「集積所を使うな」と言われて地域から孤立。捨て場所に困って、庭や別の集積所に捨てていたという。

「いつでも行くので、困ったら電話を」。毎回、置き手紙もすると、しばらくして子どもから「あと一万円しかない」と助けを求める連絡があった。

一家と話し合い、自宅は助成金を使って解体。その業者選びも付き合った。一家はアパートへ転居し、生活保護や介護保険サービスを受けて暮らす。子どもは後に「一回だけ電話し、冷たくあしらわれたら自殺するつもりだった」と話したという。苦情が寄せられてから、安定した生活を送れるよう整うまで二年かかった。

「公平さ」が重視される行政サービス。当初は「やりすぎではないか」と抗議もあったというが、最近は聞かなくなった。祖伝課長は「定着し、区の誇りだと感じている人が多いと思う」と話す。

ごみ屋敷に対応する条例は、横浜市や京都市などがつくり、名古屋市も十一月の市議会に条例案が提出される予定。同市の担当者は「無理やり処分しても、再発する可能性が高い。根本的な問題を解決するような仕組みを作りたい」と話している。

◆市町村に専門の窓口を

＜セルフネグレクトに詳しい東邦大の岸恵美子教授（公衆衛生看護学）の話＞ 家族らが介護を放棄すれば、市町村は高齢者虐待防止法に基づいて対応するが、身の回りのことを自分で放置するセルフネグレクトは防止法の対象外。全国一律の制度をつくるには、法律で支援対象と位置付け、市町村に専門の窓口を設けるべきだ。認知症の他、家族の死などつらい出来事を契機に陥る可能性もあり、決して人ごとではない。

＜セルフネグレクト＞ 日本語で「自己放任」。自分で健康や衛生管理ができず、他者による医療や介護なども拒否する。地域から孤立していることが多く、実態の把握が難しい。高齢者だけでなく、若年層にもいるとされる。

ポリオ感染、昨年37人のみ 「根絶に期待」とWHO 共同通信 2017年10月25日

【ジュネーブ共同】世界保健機関（WHO）は24日、かつて日本でも大流行したポリオ（小児まひ）について、予防接種の普及により2016年の感染者は37人まで減少したと発表した。史上最も少ない年間感染者数で「根絶に向けて期待できる兆候」（WHO当局者）として予防接種の徹底を呼び掛けている。

WHOによると、1988年には感染者が推定35万人いたが、16年に感染が確認されたのは37人。17年もこれまでにパキスタン、アフガニスタン、ナイジェリアの3カ国の計12人という。

ポリオは口から感染するポリオウイルスが神経を侵し、手足などがまひする病気。

子育て経験し「頼り上手」に フォント（書体）と歩む

日本経済新聞 2017年10月25日

モリサワ 公共ビジネス推進課係長 橋爪明代さん

新聞、本、インターネット、あらゆる媒体に使われるフォント（書体）は現代社会の必需品。2017年秋以降、「ウィンドウズ10」に搭載される「UD デジタル教科書体」のプロジェクトを手がけるなど、教育現場を舞台に書体の可能性と魅力を伝え続ける、モリサワの女性リーダー、橋爪明代さんに迫る。

皆さんは書体（フォント）を意識したことがありますか？ ゴシック体や明朝体などと呼ばれる文字の種類のことです。私が働くモリサワは、書体を作り出す会社です。皆さんもパソコンで企画書を作ったりメールを書いたりするときなど、無意識のうちにいくつもの書体に触れていると思います。

パソコンのない時代には、印刷物を作る際には「写植（しゃしょく、写真植字の略）」というシステムが使われていました。それ以前は「活字」という1文字ずつの小さな版を拾い上げ組み合わせて印刷が行われ、印刷物を作成するのは大変な労力の必要な作業でした。モリサワは1924年、写植を行うための「邦文写真植字機」を世界に先駆けて発明したことに起源を持つ会社です。それ以来、時代のニーズに合わせ、数多くの書体を世に送り出してきました。

■時代に合わせて変化し続ける書体の柔軟さ

雑誌やポスターを作るデザインの現場では、一つの媒体を作るために約30種類の書体が必要だといわれています。かつては書体の知識を持つデザイナーが使用書体を指定し、書体そのものを持っている写植業者が印刷データを作るというワークフローでしたが、パソコンの普及により、今はデザイナー自身がフォントを所有して仕事をするのが当たり前になりました。

そんな時代の流れを受けて、モリサワは2005年に213書体を搭載したフォントのライセンス製品「MORISAWA PASSPORT」を発売。その後、搭載書体を増やし、最新版では1000書体以上を収録しています。私は入社以来、この商品の流通販路の拡大や利用促進に携わってきました。ここ数年は美術大学・芸術大学をはじめとした教育機関や、教育市場を担

当し、現在では市区町村と取組む仕事にも注力しています。

■同じ商品でも訴求する相手によって響くポイントは様々

私は美大で日本画を学んだ後、デザインやものづくりをする人たちと仕事をしたいと思い、モリサワに入社。販路を広げるためのマーケット部署に配属となりました。発売されたばかりの「MORISAWA PASSPORT」を片手に家電量販店などを巡り、商品説明をして回る毎日でした。

流通業界で奮闘する中で学んだことは、エンドユーザーであるデザイナーに響くポイントと、販売会社に響くポイントは違う、ということ。同じ商品でも立場が違えばメリットを感じるポイントが違うのです。例えば、デザイナーにとっては「個性的な書体も含めて数百書体が一度で手に入ること」が魅力ですが、販売会社にとっては「一度ご契約いただければ2年目以降も高い確率で更新されること」が魅力です。それぞれのお客様の立場を理解して訴求することが、結果的にユーザー拡大につながっていったと思います。

■本物の書体に触れてほしい

現場の声を商品開発にフィードバックする重要性も実感しました。「こういう形にしたらもっと売りやすい」「欲しいと思ったらすぐに手に入る迅速な認証システムを」といった現場の声を商品開発に生かし、改良を重ねていきました。13年には美大の学生や先生たちの意見をヒントに「MORISAWA PASSPORT アカデミック版」を開発。それまでも学生向け商品はあったのですが、使える書体が30書体に限られていました。書体はその時々の方がありますし、使う世代によっても好みが違います。さらに、学生たちは卒業してデザインの仕事に就くと何百種類という書体の中で仕事をするようになります。そこで、通常版と同じ1000書体以上を収録した4年間限定のアカデミック版を作ったのです。

育児休暇後に職場へ復帰してからは仕事の効率が驚くほど上がったという

インターネットで無料のフォントが手に入る今、学生にとってモリサワのフォントは決して安いものではありません。でも、未来のデザイン界を担う学生たちにこそ、最初からプロ仕様の書体に触れて学んでほしい。そんな思いで開発した商品でした。

この「アカデミック版」の開発は私自身の転機にもなりました。当時「MORISAWA PASSPORT」を提案していた美大の先生や学生からいただいた声をきっかけに、ヒアリングや市場調査を重ね、手探りで企画をまとめていきました。外部の協力者を探すことも楽ではありませんでしたが、最も苦労したのは、社内へのプレゼンと交渉でした。

今でこそ一営業のアイデアから製品が生まれることも多いですが、まだそういった前例が少なかったため、私はなぜ今までと違うことをやる必要があるのか、何のためにこの製品が必要なのか、関係する部署の人たちに理解してもらうために多くの時間を使いました。

当時、機械メーカーの流れをくむ当社は男性社員が多く、新製品の企画を女性社員が手がけることはまれでしたが、根底にある思いや製品の必要性を理解してもらえたことで、一丸となって取り組むことができました。やはり腑（ふ）に落ちないまま仕事をするのと、納得して仕事をするのとでは、途中経過も結果も違うものです。

■「好き」「得意」と思える仕事に気が付いた

私は気が強く、周囲と意見がぶつかることも多いのですが、このプロジェクトではへこたれることもありました。そんなとき、支えになったのは「エンドユーザーであるデザイナーさんたちの現場を理解しているのは橋爪さんだけ。自信を持って企画して、自信を持って提案しなさい」という上司の言葉でした。

私だからこそできる仕事なのだと言われたことで、自分がデザインの現場に身を置いている人たちが好きなこと、その人たちの側で仕事をしたいと願っていることに改めて気付かされました。好きだと思える仕事、得意だと思える分野を見つけられたことは、仕事をする大きなモチベーションになりました。今もこうして楽しく働いているのは、あのときの気付きがあったからだと思います。

■出産は仕事の不利にならない

この「アカデミック版」の発売を見届けて、私は産休に入りました。出産日の2週間前

まで出勤していたので、おなかはかなり大きくなっていましたが、「この商品を世に送り出してからでなければ休みたい」と思いました。休んだ途端、うそのようにやることなく、ぽっかりしてしまったことを覚えています。そして、約1年半の育児休暇を経て、同じ部署に復帰しました。

復帰後は保育園へのお迎えの時間までに仕事を終えなくてはならず、必然的に仕事の効率が上がりました。「人ってこんなにやれるのか」と自分で驚いたほどです。生活も健康的なサイクルになりましたし、出産したことが仕事に不利になったと感じたことはありません。むしろ収穫がありました。

私は職場でも家庭でも基本的に「何でもやりたいタイプ」ですが、1人で全部やろうとすると、結果的に周囲に迷惑をかけてしまう。自分ひとりですべてのことはできない、ということも認めることも大事なのだと学びました。まず一生懸命やってみることは大前提ですが、周囲に頼ることをためらわなくなったことは大きな変化。子育てを経験したおかげです。

16年にリリースした新しい書体に「UD（ユニバーサルデザイン）デジタル教科書体」があります。これは、ICT教育が広がるなか、ロービジョン（弱視）やディスレクシア（読み書き障害）の生徒も読みやすいように設計したUDフォントです。タブレット端末で表示した際に、他の教科書体と比べてより読みやすいという検証結果を得ています。

ちなみに日本語の書体の場合、文字をいくつそろえると、一つの書体として機能すると思いますか？ ひらがな、カタカナの50音を収録するのはもちろん、主な常用漢字を網羅する必要があります。モリサワでは最大で1書体あたり2万3058字を収録しています。

一つの書体を10~20人のチームが2年以上かけて作るのが一般的ですが、この「UDデジタル教科書体」は研究と開発を繰り返し、10年がかりで作上げた書体です。17年秋から提供が始まるウィンドウズ10のアップデートに標準搭載されるので、ぜひ多くの人に使ってもらいたいです。

「書体は目で聞く声。ナレーターを選ぶように、書体を選ぶ」といわれます。書体は人を豊かにできる存在です。これからもその魅力をたくさんの人に伝えられるよう、お客様のニーズに合った書体・製品・サービスを届けていきたいと思っています。

■取材後記

モリサワの女性活躍の道を切りひらいている橋爪さん。産休中からたびたびお子さんを職場に連れて来ていたそうなのですが、それは「書類提出などのタイミングで総務の人が『もしよければ一緒に顔を出したら？』と言ってくれたから」（橋爪さん）なのとか。クリスマスには公認サンタクロースがオフィスにやってくることもあるそうで、「そのときは皆、子供を連れてきます。こうして時折、子供と同僚たちが顔を合わせることで職場の人たちも、うちの子を親身に感じてくれるようです。とても幸せなことだと感謝しています」（橋爪さん）。職場と家庭をゆるやかにつなげ、働き続けやすい空気を育む。素敵な計らいですね。

橋爪明代 モリサワ 公共ビジネス推進課係長。女子美術大学で日本画を専攻。卒業後の2006年、モリサワに入社。「MORISAWA PASSPORT」の流通マーケット担当を経て、現在は教育市場における書体活用の啓発活動を推進。一児の母。東京都生まれ。

性暴力の被害者支援員養成講座 2会場で特別公開 大阪日日新聞 2017年10月25日

女性の体と性に関して発信する「ウィメンズセンター大阪」（大阪市阿倍野区）は、性暴力に遭った被害者の回復をサポートする支援員養成講座を、28日と11月3日に特別公開する。

講座は、NPO法人「性暴力救援センター・大阪SACHI CO」（松原市・阪南中央病院内）との共催で9月に始まり、12月まで行う。

28日は府立男女共同参画・青少年センター（ドーンセンター、大阪市中央区）で行う

講座を公開。子どもへの性暴力の対応を巡る現状と課題を取り上げる。午後1時半～同4時半。定員40人（先着順）。受講料4千円。

3日は府立労働センター（エル・おおさか、同市中央区）で開講する。被害者や家族の心理がテーマ。午前10時～午後4時半。定員100人（先着順）。受講料6千円。

問い合わせは電話06（6632）7011、ウィメンズセンター大阪。

懐かしの昭和バー好評 京都・大山崎の老人センター 京都新聞 2017年10月25日

京都府大山崎町円明寺の町老人福祉センター長寿苑で4月から月に1回、ロビーにスクリーンを設置して懐かしの映画を鑑賞してもらう「昭和浪漫バー」が好評を博している。男性を対象に西部劇や時代劇を上映してきたが、女性も楽しめる作品を選んでほしいとの要望が出たため、ジャンルの幅を広げている。

男性を中心に社交の機会を持ってもらおうと、毎月最終週の男湯開放日の午後1～3時に町社会福祉協議会が開いている。有料でコーヒーや菓子のサービスもあり、先月からはノンアルコールビールも用意している。ロビーにソファを並べ、毎回20人ほどがゆっくりくつろぎながら名作を楽しんでいる。

名作「ローマの休日」を鑑賞する長寿苑の利用者（大山崎町円明寺）

8月までは男性向けの作品を上映してきたが、女性の利用客から「私たちも一緒に見られる映画にしてほしい」との声があった。そのため、先月はグレゴリー・ペックとオードリー・ヘプバーン出演の「ローマの休日」（1953年）を流した。

鑑賞した20人ほどの半数は女性で、坂口敏子さん（88）は「若い頃に『ヘプバーンカット』という短い髪形がはやった。映画を見て懐かしく感じ、感動した」と、興奮気味に振り返った。



台風で線路曲がった南海本線、24日も樽井―尾崎駅間で運休 復旧のめどたたず



産経新聞 2017年10月25日
台風21号の影響で線路が曲がった南海本線の男里川にかかる橋＝22日午後9時11分、大阪府泉南市（永田直也撮影）



男里（おのさと）川にかかる南海電鉄南海本線の線路が曲がった影響で、南海電鉄は24日も同線樽井（大阪府泉南市樽井）―尾崎駅（同阪南市尾崎町）間の運行を見合わせた。

■大阪―和歌山を結ぶ南海



台風21号による大雨が影響したとみられ、運輸安全委員会が鉄道事故調査官2



人を派遣して詳しい状況を調べている。復旧のめどは全くたっておらず、南海電鉄は「多くのお客さまにご迷惑をおかけし、申し訳ない」としている。

同社は24日からJR線での振り替え輸送を実施。また樽井一箱作駅間でバスによる代行輸送を実施したが、箱作駅では午前8時時点で約3時間半待ちになるなど混雑が続いた。大阪市内に通勤している50代の男性会社員は「いつもは午前7時過ぎには会社に着くが、今日は10時半になった。これから毎日続くかと思う」と疲れた表情をみせた。

南海電鉄によると、22日午後4時40分ごろ、この線路を通過した普通電車が曲がっているのを見つけた。

近鉄生駒線 依然運転めど立たず

NHK ニュース 2017年10月24日

台風21号の影響で、線路ののり面が崩れ、運行が出来なくなっている近鉄生駒線は依然として運転再開のめどがたたず、近鉄は不通区間に代替バスを走らせて対応にあたっています。

台風21号の影響で、近鉄生駒線は奈良県の三郷町内で沿線ののり面が崩れて土砂が線路をふさぎ、王寺町の近鉄王寺駅と生駒市の東山駅の間で運行が出来なくなっています。

近鉄は23日、崩れたのり面にシートをかぶせるなどの応急処置を行いました。のり面の上に建っている住宅の基礎を支える部分も崩れているため、復旧方法を慎重に検討する必要がありますとしてこれまでのところ復旧工事を行うことができておらず、依然として運転再開のめどは立っていません。

1日に上下線計162本が運行し平均で2万1000人が利用する近鉄生駒線は、沿線にとっては通勤通学などに欠かせない路線になっていて、近鉄では運行が出来ない区間にバス2台を往復させて振替輸送を行っています。

近鉄はできるだけ早く復旧の方法を確定させ、安全が確認できしだい、運転を再開したいとしています。

堺市で下水あふれる 台風影響か

NHK ニュース 2017年10月25日

24日、大阪・松原市にある下水処理場で、下水管が通っている地面が陥没しているのが見つかりました。

この影響で、隣の堺市ではマンホールから下水があふれ出し、市はバキュームカーで下水をくみ取るなどの対応に迫られました。

24日午後1時半ごろ、松原市天美西にある大阪府の下水処理場の敷地内で、地面が陥没しているのを職員がを見つけました。

陥没した場所の地下には隣の堺市から下水管が通っていて、連絡を受けた堺市が市内を巡回したところ、午後8時ごろ、堺市北区常磐町でマンホールから下水があふれ出ているのが見つかりました。

堺市によりますと下水は5か所からあふれ出し、市ではバキュームカー19台を使ってくみ取る作業に迫られました。

陥没した場所には30年以上前に敷設した直径1メートル20センチの下水管が通っていて、台風21号の大雨で下水処理場の地盤が緩み、陥没や下水管の破損が起きた可能性があるということです。

堺市などによりますと、下水管の状況の確認やその後の対応には時間がかかるとみられ、市では風呂の排水を控えるなどの協力を呼びかけています。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

